

2015年度 大阪大学 前期 国語

I 評論

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★☆☆	35分	三浦雅士『私という現象』からの出題。三浦雅士(1946～)は青森県出身の文芸評論家、編集者である。『ユリイカ』『現代思想』の編集長として活躍し、著書に『考える身体』『メランコリーの水脈』などがある。入試現代文類出の著者である。	例年比較的平易で論理的な文章が出題され、2015年度も本文は読みやすかった。問一の漢字の書き取り問題は(5)以外は全問正解するべきであった。問二は引用部分とその考察の理解を問う比較的やさしい問題だった。問三では比喩の言い換えが求められた。本文中の「サイエンス・フィクション」と「科学外のある種のフィクション」と「科学」の説明を混同しないように気をつけてほしい。問四は傍線部も参照箇所も抽象度が高く、難問であった。問一～問三を確実に解答し、問四は焦って適当に単語を並べるのではなく、本文を理解できるまでよく考えて意味の通る解答を書くよう心がけてほしい。

解答

問一 (1) 留保 (2) 回避 (3) 巧拙 (4) 興隆 (5) 嫡子

問二 科学と文学は切り離されていて、文学は科学から題材をもらう代わりに、科学上のデータに矛盾しないように注意を払い、科学に課せられた難問に真剣な考察を加えて作品をつくるということ。(87字)

問三 科学外の神学や形而上学といったある種のフィクションへの信頼から人々が発想を得て、現実的に動くことで成立したのが近代科学なのだとということ。(68字)

問四 西洋の神学や形而上学において絶対者が自己をつくるのと同様に、近代においては自己が自己をつくる。この関係のもとで人間は、創造する自己と創造される自己との分裂に直面し、アイデンティティの危機にさらされている。「人造人間」という人間によってつくれる人間を設定することで、この分裂した自己の関係を具現化することができから。(159字)

本文解説

段落解説

I サイエンス・フィクションの定義(第1～第4段落)

人は、サイエンス・フィクションという名称によって、際限もなく荒唐無稽なある種の文学をとりあえずは分類できているようにみえる。しかしそれは一時的なものではない。この分類においては、すべてのフィクションはついにサイエンス・フィクションであるでもいいかねない乱暴な議論が通ってしまうのである。サイエンスもフィクションも容易に定義しえない状況

のもとで、サイエンス・フィクションを定義することはできない。

ロジェ・カイヨワは「星間戦争や星間旅行をテーマにした単純かつ幼稚な小説」とそうでないものを二分し、後者のみをサイエンス・フィクションとして定義した。こうして科学と文学とのふさわしい関係を想定することで、サイエンス・フィクションをまともな研究しようとするのと收拾しがたい泥沼に陥ってしまうという先ほどの問題を回避しようとしているのだ。しかし、この二分法は正当なものとはいえない。星間戦争や星間旅行をテーマにしていたとしても単純かつ幼稚な小説であるとは限らないし、科学を真剣に考察していたとしてもすぐれた小説であるとは限らないからである。

Ⅱ サイエンス・フィクションとサイエンスとの関係(第5〜第11段落)

カイヨワが小説の巧拙をその科学に対する態度と連結させてしまったのは、科学と文学を対比しうる二つの領域として切り離し、そのうえで、科学が優位にあるかのように見做していたからである。この錯誤は、サイエンス・フィクションという名称そのものに由来している。この名称は、サイエンス・フィクションに先立ってサイエンスとフィクションとがすでに存在していることを物語っている。そして、近代科学の展開があつてこそサイエンス・フィクションが成立したということをし、ほとんど自明のこととして人におしつけようとする。

しかし、もしもサイエンスそのものがある種のフィクションによって成立したとすれば、サイエンス・フィクションこそがじつはサイエンスを生み出したのだという逆説が成り立つ。村上陽一郎が『西欧近代科学』の中で述べているように、近代科学は科学外のある種のフィクションへの信頼から成立したのである。宇宙成立をめぐる神話も歴史的に成立してきたほとんどの宇宙論もフィクションに過ぎない。ただ現実的に人々を動かすことができるか

どうかだけが、それらとサイエンス・フィクションとを分かつだけなのである。そして、これらのフィクションが現実的に人々を動かすことによって成立したのが科学なのだ。人々がフィクションをさらなる領域へと昇華させようとする情熱もまたフィクションによって与えられたと考えるべきだろう。

Ⅲ サイエンス・フィクションのテーマ(第12〜第15段落)

以上のことから、フィクションがサイエンスの根源的な問題を問いつめようとするのは当然なことだといえる。フィクションがサイエンスの興隆に無関心であることができないのは、まさに前者が後者の生みの親にほかならないからである。

事実、文学は常に科学がその起源を忘却しないように執拗に科学をテーマとして扱ってきた。そしてそれがそのままサイエンス・フィクションの歴史である。『フランケンシュタイン』『ジキル博士とハイド氏』『ファウスト』といった文学の中で、科学者は常に、科学の起源、すなわちフィクションの位置に立っている。フィクションへの情熱によって滅ぼされる科学者をめぐるこれらのフィクションは、フィクションを信頼することによって形成された科学への反省である。科学者たちは常にアイデンティティの危機に身をさらす存在として描かれてきたのである。この科学者の背後に近代のディレンマを見ることが出来る。それは、なにかを創造しようとするものすべてを襲うディレンマである。近代において人間は、まずなによりも自分自身をつくらうとする存在であろうとし始めた。こうしてつくるものとしての自己とつくれるものとしての自己との分裂が目に見えて進行しはじめる。これは、自己が分裂するというジキルとハイドの悲劇が一般化したものである。

つまり、自己が自己であるということにかかわること、人間が人間であるということにかかわること、このことの意味と無意味があらゆるサイエン

ス・フィクションの隠されたテーマだったのではないだろうか。このテーマは、西洋の神学や形而上学に起因している。絶対者が自己をつくるという関係は、そのまま近代における自己が自己をつくるという関係であり、そしてこの関係を可視的にしようとしたときに、人間は文学で科学者と人造人間との関係を扱うことになったのである。

百字要旨

サイエンスがサイエンス・フィクションを生んだのではなく、むしろ逆の順序だからこそ、後者は前者の根源的な問題を問い、近代において自己をつくらうとすることによるアイデンティティの危機を問題にするのである。

(100字)

用語解説

― 出典：『広辞苑 第六版』(岩波書店) (ただし、※のついた語義は解説執筆者による)

論駁 ろんぱく 相手から加えられた意見に対抗して論じかえすこと。

截然 せつぜん ①きりたつさま。

②区別がはつきりとしたさま。

パラドックス 逆説。

アポリア ①アリストテレスの哲学では、ある問題について論理的に同じように成り立つ対立した見解に当面すること。

②一般に、解決できない難問。

かしづく ①子供を大切に育てる。

②人につかえて、世話をする。後見する。

逆説 ①衆人の受容している通説、一般に真理と認められるものに反する説。

「貧しき者は幸いである」の類。また、真理に反対しているように

あるが、よく吟味すれば真理である説。「急がば回れ」「負けるが勝ち」の類。パラドックス。

②外見上、同時に真でありかつ偽である命題。

周転円

天動説で、惑星の動きを説明するために想定された小さな円。惑星は、地球を中心とする円上にあるこの小円の上を動くとする。前四世紀のヒポクラテスが唱えた。

形而上学

①アリストテレスのいう第一哲学。哲学史・問題集・定義集・実体論・自然神学の五部から成る。

②現象を超越し、その背後に在るものの真の本質、存在の根本原理、存在そのものを純粹思惟により或いは直観によって探求しようとする学問。神・世界・靈魂などがその主要問題。

粹組

①粹を組むこと。また、その粹。

②物事の仕組み。

嫡子

①嫡妻の子で家督を相続するもの。また一般に、跡つぎとなる子。よつぎ。

②嫡出の長子。嫡男。

③嫡出子。

フランケンシュタイン

①Mシェラー作の怪奇小説。一八一八年刊。科学者フランケンシュタイン博士の製作した醜怪な人造人間が、博士の約束違反に腹を立て、人間の世界に拒否されて殺人に走る物語。

②①の映画化作品。一九三一年、アメリカで製作。

ジキル博士とハイド氏

※ステイブンソンの小説。1886年刊。ジキル博士は、性格を善悪に二分する薬の発明に成功する。この薬により自らの負の人格であるハイド氏に

時々姿を変えて悪の衝動を解放していたが、次第にハイドの方が強力になってジキルに戻る事が難しくなり、ついには自らの命を断つ。二重人格の代名詞として名高い怪奇小説。

ファウスト

①ルネサンス期に生きたとされる人物。のち伝説化され、民衆本「ファウスト博士」などで有名。語学に通じ、医師・魔術師として各地を遍歴、神にそむき、悪魔メフィストフェレスに魂を売る契約をしてその助力を得、冒険と享楽の生活を送り、契約の期限が切れた時に死んだと伝えられる。マーロー・ゲートを始め多くの作家により作品化された。

②ゲートの劇詩。ファウスト伝説に基づく二部作。一七七四～一八三一年に書かれ、著者の全思想・体験を盛った畢生の大作。知識と行動への限らない意欲を持つファウストが世界を遍歴する物語。第一部は庶民の娘グレートヒエンとの恋愛悲劇を中心とし、第二部は封建末期の宮廷に行き、古典美・神話などの世界を経て、理想の国土の建設をめざす。死後、魂は悪魔のものにならず、天国に昇る。

③グノー作曲の歌劇。五幕。②の第一部に基づいたバルビエとカレーの台本。一八五九年パリで初演。

アイデンティティ

①人格における存在証明または同一性。ある人が一つの人格として時間的・空間的に一貫して存在している認識をもち、それが他者や共同体からも認められていること。自己同一性。同一性。

②ある人や組織がもっている、他者から区別される独自の性質や特徴。

絶対者

絶対的なもの。宇宙の根底として無条件・無制約・純粹・完全で、自ら独立に存在する唯一の最高存在。形而上学的にはおおむね神の観念と同一。無制約者。

設問解説

問1

解答 (1) 留保 (2) 回避 (3) 巧拙 (4) 興隆 (5) 嫡子

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 知識・教養

解説

(4)の「興隆」は同音異義語の「交流」としてしまわないように注意する。少しでも文脈を考えれば「興隆」であることは明らかなので、ここで間違えた人は見直す癖をつけてほしい。(5)の「嫡子」は書く機会があまりない単語なので、書けなくても仕方がないだろう。(1)～(3)は間違えたら差をつけられしてしまうので、できなかった人は漢字の勉強をしてほしい。

問2

解答

科学と文学は切り離されていて、文学は科学から題材をもらう代わりに、科学上のデータに矛盾しないように注意を払い、科学に課せられた難問に真剣な考察を加えて作品をつくるということ。(87字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 I・II(第1～第11段落、特に第2～第5段落)

解説

カイヨワは「科学と文学の礼儀正しい交流」を想定しているというが、科学と文学の「交流」が「礼儀正しい」とはどういうことを考える。傍線部の直前に「すなわち」という言い換えの接続詞があるので、その前の部分を見てみる。「カイヨワはここで、単純かつ幼稚な小説とそうでないものを截然と二分している。そしてこの二分法は、それが科学を真剣に考察しているか、あるいは、ただ単にどのような不可能をも可能にする魔法の杖のようなものとして利用しているに過ぎないか、によっている。」とある。この二種類のうち、「礼儀正しい」といえるのは、科学を真剣に考察することである。

また、本文に引用されているカイヨワの文章には、サイエンス・フィクションの説明として、「科学が出会う様々な難問についての考察に由来するもの」を扱うということのほかにも、「サイエンス・フィクションのあつかう不可思議とは、必ずしも科学上のデータに矛盾するものではない」ということが挙げられていることから、データに矛盾しないように注意を払うことも「礼儀正しい」の一要素だといえる。これらは第四段落でも(カイヨワの矛盾を指摘するために)繰り返されている。

気をつけてほしいのは、以上に述べた「真剣な考察」や「矛盾しないための注意」はどちらも文学から科学へと向けたものであることである。「交流」は双方方向のものであるから、科学から文学へと向かうものも解答に含める必要がある。科学が文学に与えているものは、テーマや考察する対象である。解答では、これを「題材」として示した。

ここまですべてが主要な解答要素であるが、傍線部がカイヨワによる想定の内容であることを考えると、カイヨワによる想定の内容を説明している第5段落まで目を向けたい。ここでは、カイヨワの態度を「科学と文学を対比しうる二つの領域として切り離し、しかもそのうえで文学が遠慮がちに科学の成果

を採りいれようとしているかのように事態を見做している」と説明している。

この後半部分は先ほど解説した「科学を真剣に考察」「データに矛盾しない」ということであるが、ここで注目したいのは前半部分である。ここでいわれているのは、科学と文学が二つの領域として引き離されていると見做すことが、カイヨワがそれらの「交流」を想定する前提となっている(そしてその前提を筆者は誤りだと考えている)ということである。確かに、それらがまとめて一つの領域であればそれらの間の交流など想定できないだろう。交流とは「違った系統のものが互いにまじりあうこと」だからである。(広辞苑第6版より。)

以上より解答は、「科学と文学は切り離されていて、文学は科学から題材をもらう代わりに、科学上のデータに矛盾しないように注意を払い、科学に課せられた難問に真剣な考察を加えて作品をつくるということ。」となる。

なお、「ただ単にどのような不可能をも可能にする魔法の杖のようなものとして利用するのではなく」のように、「単純かつ幼稚な小説」を否定することで「礼儀正しい交流」を説明した人もいるかもしれないが、一般に、否定することによる説明は直接的な説明よりも優先順位が低いと思っしてほしい。このように否定されるものを書いて満足してしまい、必要な解答要素が抜けていることに気がつかないことのないようにしてほしい。

《解答要素》

- ① 科学と文学は二つの領域として切り離されている
- ② 科学は文学に題材(テーマ、考察する対象、問題)を提供する(＝文学は題材をもらう)
- ③ 文学は科学上のデータに矛盾しないように注意を払う
- ④ 文学は科学に課せられた難問に真剣な考察を加える

《参照箇所》

- ① 第5段落1文目
- ② 第4段落2文目
- ③ 第2段落4文目、第4段落2文目
- ④ 第2段落4文目、第3段落2文目、第4段落2文目

問三

解答

科学外の神学や形而上学といったある種のフィクションへの信頼から人々が発想を得て、現実的に動くことで成立したのが近代科学なのだということ。(68字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 Ⅱ(第5～第11段落)

解説

「これらの(フィクションの枠組を借り)」「それ(＝フィクション)を内側から食い破る」それぞれの意味を考える。まず「フィクションの枠組を借り」のほうを見ていく。「枠組」というのは物事の仕組みのことであり、「フィクションの枠組を借りる」というのは、第9・10段落で説明されているように、近代科学が「科学外のある種のフィクション」、すなわち神学や形而上学といったものの仕組みを用いることを示している。第10段落の具体例を使ってもう少し説明する。ケプラーの例を見てみよう。彼は「世界が、数的調和のなかにある」という、形而上学における世界の仕組みを信頼し、それに基づいて法則を導こうとした。このように、形而上学などのフィクションへの信頼から発想を得ることが、「フィクションの枠組を借りる」ということである。

次に、「それ(＝フィクション)を内側から食い破る」について説明する。

あるものを内側から食い破るというのは、あるものから生まれ、そのあるものを破壊してしまうことを表している。(卵の殻を内側から食い破るひな鳥を想像してほしい。)この文章においては、フィクションが前述のように現実的に人々を動かすことによって、フィクションから近代科学が生まれて成立することを示す。(このときそれはフィクションとは呼ばれなくなるだろう。)

以上より解答は、傍線部の構造に合わせて、「科学外の神学や形而上学といったある種のフィクションへの信頼から人々が発想を得て、現実的に動くことで成立したのが近代科学なのだということ。」となる。

《解答要素》

- ① 近代科学は科学外の神学や形而上学といったある種のフィクションへの信頼から発想を得た。
- ② 近代科学は(フィクションにより)現実的に人々が動いて成立した。

《参照箇所》

- ① 第9段落3～5文目、第10段落2文目
- ② 第10段落2・5文目

問四

解答

西洋の神学や形而上学において絶対者が自己をつくるのと同様に、近代においては自己が自己をつくる。この関係のもと人間は、創造する自己と創造される自己との分裂に直面し、アイデンティティの危機にさらされている。「人造人間」という人間によってつくられる人間を設定することで、この分裂した自己の関係を具現化することができ

るから。(159字)

難易度 ★★★★★

設問パターン 要約型+理由補填型

解答範囲 Ⅲ(第12～第15段落)

解説

『絶対者と自己の関係』が『人造人間のテーマ』に結びつくのはなぜかという設問だが、傍線部が設定されているので傍線部を利用して解答していく。傍線部に沿って、「絶対者と自己の関係」が「自己と自己との関係である」ことを説明し、なぜ、この関係(Ⅱ「自己と自己との関係」)を可視的にしようとしたときに「人造人間のテーマに遭遇した」のかを説明すると、この設問の解答となる。

まず、「絶対者と自己の関係は、そのまま自己と自己との関係である」の部分について考える。絶対者と自己との関係は、本文に直接的には書かれていないが、絶対者が自己(Ⅱ人間)をつくったという関係である。これは、自己と自己との関係から逆算して考えたほうがわかりやすいだろう。自己と自己との関係は、第13段落に「近代において人間は、まずなによりも自分自身をつくり出す存在であろうとはじめた」「つくるものとしての自己とつくりられるものとしての自己」とあるように、自己が自己をつくるという関係である。この、なにもかながなにもかをつくるという関係に絶対者と自己をあてはめると、絶対者が自己をつくるという関係になる。これは「絶対者と自己との関係は、そのまま自己と自己との関係」(Ⅱ自己が自己をつくるという関係)という本文の記述に沿う。これは、傍線部の直前で言及されている西洋の神学や形而上学において、神や絶対者が人間を創造したとされていることに適する。

次に「人間はおそらく人造人間のテーマに遭遇したのである」の部分につ

いて考える。これは、文学で人造人間を扱うことになったということである。それでは、なぜ人造人間を扱うのか。それは、人造人間のテーマにおける科学者と人造人間との関係は、「自己が自己をつくる」関係を具現化したものだからである。第13段落を見ながら説明する。この段落では、まず人造人間をテーマとする諸小説を挙げたうえで、「科学者たちはつねにアイデンティの危機に身をさらす存在として描かれてきたのである。」と述べている。一方で、近代の人間については「近代において人間は、まずなによりも自分自身をつくり出す存在であろうとはじめた。こうしてつくるものとしての自己とつくりられるものとしての自己との分裂が目に見えて進行しはじめる。」と書かれている。これは、自己同一性が失われる、すなわちアイデンティティの危機に身をさらしているということであり、先ほどの科学者についての説明と一致する。実際、この直後に「ジキルとハイドの悲劇が一般化するのだ。」とある。ジキルは科学者、ハイドはジキルによってつくられた人格、いわば人造人間である。ここから、科学者と人造人間との関係は「自己が自己をつくる」関係を具現化したものだといえる。だからこそ、「自己が自己をつくる」関係を可視的にしようとしたときに科学者と人造人間との関係を扱うのである。

以上より解答は、「西洋の神学や形而上学において絶対者が自己をつくるのと同様に、近代においては自己が自己をつくる。この関係のもとで人間は、創造する自己と創造される自己との分裂に直面し、アイデンティティの危機にさらされている。「人造人間」という人間によってつくられる人間を設定することで、この分裂した自己の関係を具現化することができるから。」となる。

《解答要素》

- ① 絶対者と自己との関係：西洋の神学や形而上学において絶対者が自己をつくる
- ② 自己と自己との関係：近代において自己が自己をつくる
- ③ ②の関係のもとで人間は、自己が分裂してアイデンティティの危機にさらされている
- ④ 科学者と人造人間との関係は、②③のような関係を具現化したもの

《参照箇所》

- ① 第15段落1文目
- ② 第13段落10文目
- ③ 第13段落11文目
- ④ 第13段落7・12文目、第14段落1文目

(千代田麻理、正木僚、森岡桃子)

2015年度 大阪大学 前期 国語

Ⅱ 小説

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★☆☆	35分	堀辰雄『墓碑の家』からの出題。堀辰雄（1904～1953年）は小説家。東京生まれ。東京大学文学部国文科卒業。室生犀星・芥川龍之介に師事し、西欧の心理主義文学を吸収して、繊細な心理分析を特徴とする文学世界を築いた。代表作に『風立ちぬ』『菜穂子』などがある。	大阪大学の第二問は小説の出題が多く、第一問よりも難しいことが多い。問一や問四のような「考えを述べなさい」という設問では解釈や推論を加える必要があるが、現代文の問題では本文を根拠に考えることが第一原則である。小説のような、幅広い解釈が可能な文章であっても解答するうえで軸になるものはやはり本文である。採点者に理解してもらいやすい解答にするために、極力本文に依拠して書くことが望ましい。また、問二のように表現効果を問う設問が頻出かつ難問である。大阪大学文学部の過去問やセンタ―試験第二問の過去問を利用して対策してほしい。

解答

問一 「私たち」は日頃から通学路沿いにある寺の境内に侵入し、寺の爺たちに怒られて追い出されてもますます面白がって侵入し続けていた。

そこにきて、寺の裏に誰も知らない抜け道があると聞いて、その道を通ったら面白そうだとみんなが興味を持ったから。（116字）

問二 回想でありながら現在形を用いることで、柴折戸の向こうに行った友人らが目の前に広がる意外な場所に驚いているらしい様子だけは伝わってくるものの、自分にはまだ順番が回ってこない「私」のまだ見ぬ景色への期待やじれったさを、臨場感をもって感じさせる効果。

（122字）

問三 常泉寺の奥の院の庭にたどり着いてしまい、殆ど人家が目に入らない不気味な場所を歩いていて不安だったが、そんな寺の裏という四方から墓に囲まれているであろう場所にぽつんと花に埋もれた小家を見つけて驚き、その家の中に母よりも少し若い美しい婦人がいるような気がした。（128字）

問四 秘密の抜け道を通ったときに不安や驚きを感じていたことに加え、爺たちがかつてないほど腹を立てて追いかけて来たので、いつも以上に爺たちを恐れ、また面白がって興奮するという心情。（86字）

本文解説

段落解説

I 常泉寺に侵入して面白がる日々（第1・第2段落）

「私」が小学三四年のころ、「私」をはじめとした子供たちはよく、通学路にある常泉寺というかなり大きな寺の境内に侵入していた。境内を荒し廻

っているところを寺の爺に見つかると怒られてたちまち追い出されるが、そうなるが一層侵入することが面白いことのように思われ、爺に見つかるのを恐れながらも侵入し続けた。線香などを売ったり掃除をしたりしているその爺たちのことを、「私たちが」は「赤鬼」「青鬼」と呼んでいた。

Ⅱ 寺の裏の抜け道を通ってみる(第3〜第6段落)

秋の学期がはじまった最初の日の学校の帰り道で、子供たちのうちの一人が、数日前に常泉寺の裏を抜ける、まだ誰も知らなかった抜け道を見つけたといって得意そうに話した。そこで「私たちが」はすぐそのまま全員一致でその抜け道を通ってみることにした。

通り抜けられそうもない路地の中へ、「私たちが」の小案内者がずんずん入って行き、「私たちが」もさも面白いことでもするように入って行った。最初のうちはゴミゴミした汚らしい小家の台所の前などを右へ折れたり左へ折れたりしていたが、そのうちある柴折戸を先頭のものから順番に押しして中へ入ると、目の前には、小さな溝と竹垣の向うに、まだ見たこともないような怪奇な庭が横たわっていた。ふいに意外な場所に出て、いままで何か言いあっていたものたちが急にぱったりと話しやめた。それが常泉寺の奥の院の庭であることを知って、「私たちが」は一層驚いた。それから「私たちが」は急にひっそりとなって、溝つたいに一列に並んで歩きだした。そこまで来てしまつと、どっちを向いてももう殆んど人家らしいものが目に入らなかつた。

「私たちが」はいつの間にかとんでもない場所へ来てしまったような不安な気持ちになって、お互いに無言のまま、おっかなびっくり歩き続けて行った。そのうち一軒ぼつんと小さな家が見え始めて、「私たちが」は再び驚いた。その小家のあたりだけは雑草が綺麗に取除かれ、その代りそこら一面に見知らぬ花が美しく咲きみだれていた。その小家の前を「私たちが」がこっそり通り

抜けようとしたとき、その家のなかの様子は少しも見えなかつたにもかかわらず、「私」はふと、なかに誰かが居るような気配を感じた。その瞬間「私」には、その人が自分の母よりすこし若い美しい婦人であるように思われてななかつた。しかし今の「私」が考えてみると、そういうようすすべては、その小家を埋めるようにしていた、黄色や白色の見知らぬ花々の微妙な影響に過ぎなかつたのかもしれない。

この小家のあたりから、道は寺の庫裡の方に通じているらしく、竹垣の一方は常泉寺の奥の院の庭で、もう一方は墓地になっていた。「私たちが」はその墓地の方へ抜け出ようとして、その竹垣を乗り越すのに苦心を重ねた。

Ⅲ 寺の爺たちに見つかって逃げ廻る(第7段落)

「私たちが」はこの抜け道をたつた一遍きりしか通つたことがない。それは、この時その竹垣をみんなで乗り越してしまわないうちに、寺の爺たちに見つかつて、散々な目に遇つたからだ。爺たちはかつてないほど腹を立てていた。彼らは二人がかりで、何処までも「私たちが」を追いかけて来た。そのときは「私たちが」も何だか興奮して、逃げ廻りながら口々に「赤鬼やあい……青鬼やあい……」と叫んでいた。

百字要旨

子供たちで通学路沿いの寺の抜け道を通つてみたとき、雑草だらけの場所
で唯一花に埋もれた小家に、「私」は美しい婦人の気配を感じた。帰り際にかつてなく腹を立てた寺の爺たちに見つかり、皆で興奮しながら逃げた。

(100字)

用語解説

―出典：『広辞苑 第六版』（岩波書店）

榊（しきみ） シキミ科の常緑小高木。山地に自生し、また墓地などに植える。高さ

約三メートル。葉は平滑。春、葉の付け根に黄白色の花を開く。花卉

は細く多数。全体に香気があり、仏前に供え、また葉と樹皮を乾かし

た粉末で抹香や線香を作り、材は器具用。果実は猛毒で、「悪しき実」

が名前の由来という。シキビ。コウシバ。コウノキ。木密。仏前草。

鐘楼 かねつき堂。しゅうろう。

筋向こう 斜めに向かいあうこと。

奥の院 主に寺院の本堂より奥の方、最高所などにあつて、霊仏または開山・

祖師などの霊を安置する所。高野山のそれが有名。

おっかなびつくり 驚きこわがるさま。おそろおそろ。こわこわ。

年恰好 外見から推し量った年齢。年齢の程あい。

設問解説

問一

解答 「私たち」は日頃から通学路沿いにある寺の境内に侵入し、寺の爺た

ちに怒られて追い出されてもますます面白がって侵入し続けていた。

そこにきて、寺の裏に誰も知らない抜け道があると聞いて、その道を通

つたら面白そうだとみんなが興味を持ったから。(116字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型十理由補填型

解答範囲 Ⅰ（第1～第2段落）、Ⅱ（第3～第6段落、特に第3段落）

解説

「まだ誰も知らなかった抜け道を見つけた」と友達が言ったのでその抜け道を通つてみることにした、というのは感覚的に理解できてしまうので理由説明が難しく、解きにくい問題だった。感覚で理解できることでも、傍線部近くを中心に丁寧に本文を読み、根拠を見つけてほしい。

傍線部の始めに「そこで」と因果関係を明示する接続詞があるので、傍線部の直前を見る。友達のうち一人が「まだ誰も知らなかった抜け道を見つけた」といつて得意そうに話した」とある。ここに二つ目の理由がある。「まだ誰も知らなかった」からこそみんなが興味を持って、「一人の異議もなく」抜け道を通つてみることにしたのである。

ただし、まだ誰も知らない抜け道があるからといって、そういったものに関心がない子供もいるだろう。ここに二つ目の理由がある。第2段落での描写から、「私たち」は日頃から通学路沿いにある寺の境内に侵入し、寺の爺たちに怒られて追い出されてもますます面白がって侵入し続けるような子供たちであったことがわかる。そのような子供たちだからこそ抜け道に強く心を惹かれ、「すぐそのまま」行くことになったのである。

以上の二つの理由が解答の中心となるが、抜け道を通つてみることにした直接的な理由は、抜け道を通つてみることに興味を持ったことである。「心を惹かれた」など、別の表現でも構わない。「いつも寺の境内に侵入して面白がっていたから抜け道を通つてみることにした」「まだ誰も知らない抜け道だからその道を通つてみることにした」というのは少し論理の飛躍があることに気づいて、直接的な理由を自分で補えるとよい。これを踏まえて解答は、『私たち』は日頃から通学路沿いにある寺の境内に侵入し、寺の爺たちに怒られて追い出されてもますます面白がって侵入し続けていた。そこにきて、寺の裏に誰も知らない抜け道があると聞いて、その道を通つたら面白

そつだとみんなが興味を持ったから。」となる。

《解答要素》

① 『私たち』はいつも寺の境内に侵入して面白がっていた」

② 「まだ誰も知らない抜け道であった」

③ 「①②だからみんな抜け道に興味を持った(面白そつだと思つた、心を惹かれた)」

《参照箇所》

① 第2段落7文目

② 第3段落2文目

③ 第3段落3文目

問二

解答

回想でありながら現在形を用いることで、柴折戸の向こうに行った友人らが目の前に広がる意外な場所に驚いているらしい様子だけは伝わってくるものの、自分にはまだ順番が回ってこない「私」のまだ見ぬ景色への期待やじれつたさを、臨場感をもって感じさせる効果。

(122字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 特殊型

解答範囲 Ⅱ(第3〜第6段落、特に第4段落)

解説

「(過去や未来のことなのに)現在形を用いることで臨場感を与える」という手法はよくあるものなので、表現効果を問う設問の中では解きやすい方だったのではないか。現在形を用いることで臨場感が生まれるのは、例えば過

去形を使うと「今」の時点から当時のことを記述していることになり、書き手と当時の出来事との間に距離があるのに対して、現在形を使うと当時の時点に立って記述していることになり、書き手が当時の出来事を目の当たりにしているようになるからである。この「臨場感」を解答の中心として、あとはこの場面に沿つた説明を付け加えればよい。この場面に「臨場」したら何を感じるのかということである。

まず傍線部付近における「私」の状況を押さえよう。傍線部の前の2文で、柴折戸の向こうに入つて行つた友人たちが静かになる様子が書かれている。そして傍線部より、その様子を見た「私」が、彼らが不意に意外な場所に出たのだと推測していることがわかる。

次に、この場面における「私」の心情を考えると、傍線部の次の文で「やっと自分の番になつて」とあることから、「私」は自分の番が来ることを待ち望んでいたことがわかる。友人らが驚く反応だけを見せられていたことじれつたくなつていたと思われる。

以上より、この場面に「臨場」したら、柴折戸の向こうに行つた友人らが意外な場所に驚いている様子だけは伝わってくるものの自分にはまだ順番が回ってこない「私」の期待やじれつたさを感ずることになるので、解答は、「回想でありながら現在形を用いることで、柴折戸の向こうに行つた友人らが目の前に広がる意外な場所に驚いているらしい様子だけは伝わってくるものの、自分にはまだ順番が回ってこない『私』のまだ見ぬ景色への期待やじれつたさを、臨場感をもって感じさせる効果。」となる。

《解答要素》

① 「臨場感を与える」

② 『私』はすでに柴折戸の向こうに行つた友人の様子から、彼らが意外

な場所に驚いていると知る」

- ③ 『私』はまだ順番が来ていなくて待ち遠しく思っている(期待、じれったさ、もどかしさ)「」

《参照箇所》

- ② 第4段落5・6文目

- ③ 第4段落7文目

問三

解答

常泉寺の奥の院の庭にたどり着いてしまい、殆ど人家が目に入らない不気味な場所を歩いていて不安だったが、そんな寺の裏という四方から墓に囲まれているであろう場所にぽつんと花に埋もれた小家を見つけて驚き、その家の中に母よりも少し若い美しい婦人がいるような気がした。(128字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 Ⅱ(第3～第6段落、特に第4・5段落)

解説

「私」の心情は事あるごとに本文中に明示されているので、それらを順にまとめるだけの、比較的書きやすい設問だといえる。しかし「私」の心情が本文の始めの方から何回も書かれている分、どこから解答に含めるべきか、範囲を決めるときに悩んだかもしれない。

問われていることだけに忠実に答えようとする範囲が定まる。「今」の『私』は『そういうようすすべて』は花の影響に過ぎなかったのかも知れないと考えているが、当時の心の動きはどのようなものだったのか? というのが問いである。やみくもに色々な場面の心の動きを書くのではなく、「そ

ういうようすすべて」における心の動きを、動く直前の心情、動いたきつかけ、動いた直後の心情を中心に書くようにする。

まずは「そういうようすすべて」の指示内容を押さえる。「これは直前の、『私はふと〜誰かがいるような気配を感じ、その瞬間私には〜美しい婦人であるように思われてならないのだった。』の部分のことである。

これは「当時の心の動き」が発生した後の心情であり、この設問では「動き」を問われているので、次に「当時の心の動き」が発生する前の心情も押さえる。このように変化したのは、「一見ぽつんと小さな家が見え始め」て「その見えない小家の前を私たちがこっそり通り抜けようとした」からであり、小家が見える前の「私」の心情は、第5段落1文目「私たちは不安な気持ちになつて〜」から、「不安」であるとわかる。

以上より解答の中心は、「歩いているときは『不安』だったが、小家を見て『美しい婦人がいるように思われた』という心の動きである。ただし、小家を見たとき、「美しい婦人がいるように思われた」という前にまず驚いている。これも「心の動き」に含まれるので解答に入れる。また、「不安」だったのは、「とんでもない場所」に来てしまったからであり、この感情は、常泉寺の奥の院の庭であるのを知ったあと「私たち」が急にひっそりとなつたときから続いている。驚いた理由は、「そのうち再び驚かされたのは、そんな寺の裏なんぞの、おそらく四方から墓ばかりに取り囲まれているであろうようなところに、一軒ぽつんと小さな家が見え始めたことだった。」という部分に示されている。これらも踏まえて解答は、「常泉寺の奥の院の庭にたどり着いてしまい、殆ど人家が目に入らない不気味な場所を歩いて不安だったが、そんな寺の裏という四方から墓に囲まれているであろう場所にぽつんと花に埋もれた小家を見つけて驚き、その家の中に母よりも少し若い美しい婦人がいるような気がした。」となる。

《解答要素》

- ① 「常泉寺の奥の院の庭にたどり着いた」
- ② 「人家が殆どない不気味な場所を歩いてきた」
- ③ 「①②だから不安だった」
- ④ 「墓ばかりに囲まれているであろうようなところに花に囲まれた小家を見つけた」
- ⑤ 「④だから驚いた」
- ⑥ 「その小家の中に母よりも少し若い美しい婦人がいる気がした」

《参照箇所》

- ① 第4段落9文目
- ② 第4段落11文目
- ③ 第4段落10文目、第5段落1文目
- ④ 第5段落1・2文目
- ⑤ 第5段落1文目
- ⑥ 第5段落3文目

問四

解答 秘密の抜け道を通ったときに不安や驚きを感じていたことに加え、爺

たちがかつてないほど腹を立てて追いかけて来たので、いつも以上に

爺たちを恐れ、また面白がって興奮するという心情。(86字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要約型十一一般化型

解答範囲 I (第1・第2段落)、II (第3～第6段落)、III (第7段落)

解説

傍線部の「私たち」の心情として本文中に明示されているのは「興奮」だ

けである。しかしこれはあまりに漠然とした言葉なので、この場面の「私たち」の状況から、どのような「興奮」なのか推し量りたい。

最終段落の状況は、第2段落に書かれている、「私たち」が寺の境内や墓地に侵入したときの状況に似ている。第2段落によると、「私たち」は爺に見つかつて怒られ追い出されるのを「恐れ」る一方で、爺に怒られるとより一層、侵入するのを「面白い」と思っていた。このような心情が最終段落にも当てはまるか確認しよう。まず爺たちを傍線部の状況でも「恐れ」ていたことは、最終段落1文目で、寺の爺たちに見つかつて散々な目に遭ったからその抜け道を二度と通らなかつたと書かれていることからわかる。また爺たちに怒られて「面白がって」いたことは最終段落5文目のからかいの言葉からわかる。よってこれらの心情は最終段落の「私たち」にも当てはまるといえる。

「興奮」の理由としてまず挙げられるのは、爺たちがかつてなく腹を立てていたために前述の「恐れ」や「面白さ」もかつてないものになっていた、ということである。実際、寺の境内への侵入は怒られても続けていたのに抜け道に入るの是一次きりだったことや、普段からかいの言葉を直接言っていたとは書かれていないのにこのときは言っていたと書かれていることから、「恐れ」や「面白さ」がいつも以上だったとわかる。

他にも、秘密の抜け道を通っているときに「不安」や「驚き」を感じていたことも挙げられる。ホラー映画を見るときなどの鼓動の高まりを想像してほしい。「不安」や「驚き」という緊張状態の延長線上に「興奮」がある。この「不安」や「驚き」と「興奮」との因果関係は本文中に明示されていないが、「考えを述べなさい」という設問なので、本文の記述から無理なく推論できることは書くことが求められていると思われる。

《解答要素》

- ① 「秘密の抜け道を通ったときに不安や驚きを感じていた」
- ② 「爺たちがかつてないほど腹を立てて追いかけて来た」
- ③ 「いつも以上に爺たちを恐れ、また面白がっていた」
- ④ 興奮していた

《参照箇所》

- ① 第4段落6・9文目、第5段落1文目
- ② 第2段落7文目、第7段落1・5文目
- ③ 第7段落4文目
- ④ 第7段落4文目

(千代田麻理、昆野祐己、森岡桃子)

2015年度 大阪大学 前期 国語

Ⅲ 古文(説話)

難易度	★★★☆☆
所要時間	20分
出典	『古本説話集』からの出題。平安末期に成立したとされる編者未詳の説話集。実は題も未詳で、『古本説話集』という題も仮称である。王朝貴族の和歌説話を中心とする上巻全四六編と、仏教説話からなる下巻全二四編。『今昔物語集』や『宇治拾遺物語』と共通する説話が多い。本文は、三船の才とうたわれる藤原公任の和歌の才能を象徴するエピソードで、上巻に収められている。
傾向と対策	前書きに場面の説明が詳しくなされていることもあり、全体の内容把握に困難はないだろう。設問の該当部分を中心に丁寧に読めるかが試される問題が多く、よい答案を作るためには正確な知識が必要である。 問一は基礎的な単語問題。問二は、語彙のレベルはそれほど高くないが、省略が多いので必要な内容や語句を適宜補うべきだろう。問三は、直接問われているのは公任の心情であるが、傍線部を訳したうえで、文字通りの心情を説明すればよい。問四は、初見の和歌を、本文全体の内容を踏まえて解釈する必要があるうえ、瑞雲(めでたいことの前兆として

傾向と対策

現れる紫色の珍しい雲の知識があることが望まれるので、出題者が求める答案を作ることは容易ではなかっただろう。与えられた情報や該当部分の場面状況から考えさせる問題はよくあるので、解答へのプロセスを確認しておくとうい。

《この解説の使い方》

本文読解 「本文を読み始める前に」と「通読」からなる。古文の実力のある人が実際に本文を読むとき何を考えているか(「本文を読み始める前に」および「通読」の◎部分)や設問解説では述べられなかった重要なポイントなど(「通読」の★部分)について書いてある。どこに注意して本文を読めばいいかわからない人、本文を読むのに時間を使いすぎる人は、この項目を見てみよう。

設問解説 設問ごとの詳細な解説を、古文が苦手な人にも思考の流れが十分に伝わるように書いてある。古文が苦手な人はまずは「合格答案」レベルの解答を、得意な人は「満点答案」を目指そう。

本文解説 「現代語訳」と「用語解説」からなる。「現代語訳」は基本的に受験生レベルの古文知識で作れる簡単な訳になっている。ほかの項目を読み終えたあとの復習に使おう。

解答

問一 (ア) まったく

(イ) 熱心に

(ウ) 心がひかれると

問二

(a) 歌人たちは、立派な歌も詠み出すことができないが、そうはいってもやはり大納言ならうまくお詠みになるだろう。

(b) 下手に詠んで献上してしまうようなことは、献上しないよりも劣っていることだ。

(c) あつてよいことではない。ほかの人の和歌はなくてもよいだろうが。

問三

① 永任らほかの優秀な歌人たちでさえうまく詠めないのだから、自分が詠めないのも道理であるので、和歌が詠めないことを許してほしいという気持ち。

② 苦し紛れに詠んだ歌だったが、道長をはじめとして、皆が素晴らしいと称賛してくれたので、役目を果たせたと安心する気持ち。

問四

屏風に描かれた藤の花を、紫色の雲に例え、それがどこの家の吉兆かと問うことで、藤原家の繁栄を象徴する彰子の入内を祝う内容。

本文読解

本文を読み始める前に

前書きで、本文がどういった場面なのか簡潔に説明されている。登場人物も超有名人ばかりなので、比較的読みやすそうだ。

通読

第1行～第3行「今は昔、女々つかはず。」

◎前書きに書いてある通り、ことが書いてある。

◎道長は複数の歌人に歌詠みを命じていて、公任に藤の花の屏風が割り当てられたということだろう。公任は遅刻しているようだ。

第3行～第6行「権大納言行々ければ、」

◎一文が長い！ 接続助詞・敬語・文脈を頼りに、主語を追いかけてから読み進めよう。

◎権大納言行成は、歌詠みが詠んだ歌を屏風に書く仕事を任されているようだ。

◎公任は、早く歌を詠み出すように急かされている。

第6行～第9行「『さらにはくたまへば、」

◎素晴らしい歌詠みが集まる中で下手な歌を詠んでしまったては悪い評判が残ってしまうと言ひ逃れをする公任に対し、さらに責め立てる道長。

第9行～第12行「大納言、『くたまへば、」

◎文が長いとはいえ、よい歌が思いつかず言い訳を繰り返す公任を道長がさらに急かすという場面が繰り返されているだけ。設問該当部分以外は内容さえつかめていれば十分なので時間と相談しながら読む。

第12行～第16行「大納言、いゝしりける。」

◎公任がついに和歌を書きあげた場面。「いみじく思ひわづらひて」とあるから、しびしび書き上げた和歌なのだとわかる。

◎「さりとて」には、「ほかの歌人はうまく詠めなかったけれども・詠むまでに時間がかかったけれども・悩みながら詠んだようだけれども」というような意味があるだろう。

第16行～第17行「大納言も、くまひける。」

◎自信はなかったが、公任が自分の和歌を称賛されて安心するというオチ。

設問解説

問一

解答 (ア) まったく

(イ) 熱心に

(ウ) 心がひかれると

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

(ア) 副詞「さらに」は、「さらに+打消」の形で「まったくくない」という強い否定の意味を表す。

(イ) 形容動詞「まめやかなり」の連用形。現代と同様、「まめ」は真面目であることを表し、「まじめだ・熱心だ」などと訳す。

(ウ)

形容動詞「心にくし」の連用形。「心にくし」は、相手と比較した自分の劣等感から、相手がにくいほど「①奥ゆかしい・心ひかれる②素晴らしい」という意味をもつ。

(ウ)

形容詞「心にくし」の連用形。「心にくし」は、相手と比較した自分の劣等感から、相手がにくいほど「①奥ゆかしい・心ひかれる②素晴らしい」という意味をもつ。

問二

解答

《合格答案》

(a) 歌人たちは、立派な歌も詠み出すことができないが、そうはいってやはり。

(b) 下手に詠んで献上してしまうようなことは、献上しないよりも劣っていることだ。

(c) あってよいことではない。ほかの人の和歌はなくてもあり得るだろう。

《満点答案》

(a) 歌人たちは、立派な歌も詠み出すことができないが、そうはいってやはり大納言ならうまくお詠みになるだろう。

(b) 下手に詠んで献上してしまうようなことは、献上しないよりも劣っていることだ。

(c) あってよいことではない。ほかの人の和歌はなくてもよいだろうが。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

(a)

直後の「と、誰も心にくがりけるに」からわかるように、傍線部は公任の歌を心待ちにする周りの人々の心中である。「歌詠みども」は、道長に歌詠みを命じられたほかの歌人たち。「はかばかし」は「しつかりしている・立派だ」という意味の形容詞。「えく打消」は「くできない」という意味の表現なので、「え詠みいでぬ」で「詠み出すことができない」という訳になる。

ここまでで、「ほかの歌人たちは、立派な歌を詠み出すことができない」と

いう訳が完成。「さりとも」は「さ+あり+とも」の形から推測できるように、「そうはいつでもやはり」と訳される表現。逆接的な表現なので、接続助詞「に」も逆接で訳するのが適切だろうと考えて、全体として「ほかの歌人たちは、立派な歌を詠み出すことができないが、そうはいつでもやはり」という訳に至る。これでも十分《合格答案》だが、「そうはいつでもやはり」の続きが気になるところ。ほかの歌人たちはうまく歌を詠めていないけれどそんな状況でもやはり……「公任ならうまく詠むはずだ！」というのが人々の期待だろう。「ここまで訳に加えることができれば完璧。

(b) 殿(道長)の「いかにぞ遅し」という発言への返答なので、傍線部の発話者は公任。歌を詠むのが遅いという指摘に対し、どのような返答が予想されるかを考えながら訳すとよい。

動詞「たてまつる」「まるらす」は「し申し上げる」という謙讓の補助動詞のほかに、「差し上げる・献上する」という意味の本動詞としてはたらく。「この場面で献上するものはもちろん和歌。助動詞の訳にも注意を払おう。「たら」は完了の助動詞「たり」の未然形、「ん(む)」は婉曲の助動詞「む」の連体形、「ぬ」は打消の助動詞「ず」の連体形、「たる」は存続の助動詞「たり」の連体形、「なり」は断定の助動詞「なり」の終止形。これらをすべて訳出すると、《満点答案》となる。道長に遅いと責められても出来ない歌を詠むことはしない公任の信念、納得のいく歌が詠み出せないならば読まない方がましだという公任の主張で、文脈にも適合する。

(c) 「あるべき」にもあらず「は、あつてよいことではない」という直訳で

十分意味が通る。「べき」は適當の助動詞「べし」の連体形。

「異人」は「ほかの人」、ここでは「ほかの歌人」を指す。「異十名詞」という表現は「ほかの・いろいろな」という意味でよく登場する。「なむ」は強意の助動詞「ぬ」の未然形+推量の助動詞「む」の終止形。「きつとらだろ」と訳すのがセオリーだが、この訳がうまく当てはまらないときもあるので、「はらずだ」「であつてもよいだろう」などと訳せることを頭に入れておくとうい。「ほかの人の歌はなくてもある(あり得る)だろう」では意味が通じないので、「ほかの人の歌はなくてもよいだろう」と柔軟に訳す。この問は、「ありなむ」を文脈に即して柔軟に訳せるどうかを鍵であった。知識を駆使しても訳せなければ、「ほかの人の歌はなくても」に続くふさわしい表現を模索するのの一つの手である。

問三

解答

《合格答案》

- ① この人たちがさえうまく詠めないのだから、自分が詠めないのも仕方がないことだと許してほしいという気持ち。
- ② 皆が自分の歌を素晴らしいと評価してくれたと感じて安心する気持ち。

《満点答案》

- ① 永任らほかの優秀な歌人たちがさえうまく詠めないのだから、自分が詠めないのも道理であるので、和歌が詠めないことを許してほしいという気持ち。
- ② 苦し紛れに詠んだ歌だったが、道長をはじめとして、皆が素晴らしいと称賛してくれたので、役目を果たせたと安心する気持ち。

難易度 ★★☆☆

設問パターン 内容説明(要約型)

解説

①

「どのような気持ちがあらわれているか」という問い方をしているが、実質は現代語訳問題といつてよい。

「これら」は公任から見た「この人たち」＝「ほかの歌人」のこと。古文では、「これ・それ」などの指示語が人に対して使われることはよくある。副助詞「だに」は類推「くさえ」と限定「せめて」だけでも「の二つの意味を必ずおさえよう。ここでの意味は類推。「この人たちでさえこのように詠み損じるのだから」となる。

「え詠みはべらぬ」は不可能「えく打消」の形なので、「詠めずにおりますこと」と訳せる。「ことわり」はここでは「道理」の意味。「公任が詠めずにおりますことも道理なので」。

全体として「この人たちでさえこのように詠み損じるのだから、公任が詠めずにおりますことも道理なので、許してくださいさるべきだ」と訳せる。

これを、問に対し適切な形に直して答案とすればよい。《満点答案》では、「この人たち」を詳しく説明している。

②

傍線部に至る経緯を踏まえたうえで公任の心情を考えよう。流れはこうだ。道長に早く歌を詠むよう急かされる。

←
人々に期待されながらもいい歌が思い浮かばず、言い逃れを繰り返す。

逃れきれなくなりやむを得ず一首書きつづる。

←
詠みあげられた歌を聞いた皆から称賛を受ける。

心情は「今なむ、胸すこし落ちぬはべりぬ」という発言にはっきりと表れている。現代の「胸をなでおろす」という表現からも類推できるように、このときの公任の心情を一言で表すなら「安心」であろう。安心したのは、「みな人いみじと思ふ気色」を見たから。「いみじ」は程度がはなはだしいことを表す形容詞で、ここでは「素晴らしい」の意味。「気色」は「様子・表情」などの意味がある。では、なぜ皆が称賛してくれると安心するのか。それは、急かされて苦し紛れに詠んだ歌だったので、自信がなかったからだと読み取れる。このように要素を一つ一つ丁寧に盛り込み、抜け目のない答案を作りたい。

問四

解答

《合格答案》

紫色の雲のように見える藤の花は藤原家の繁栄の印だとして、彰子の入内を祝う内容。

《満点答案》

屏風に描かれた藤の花を、紫色の雲に例え、それがどこの家の吉兆かと問うことで、藤原家の繁栄を象徴する彰子の入内を祝う内容。

難易度 ★★☆☆

設問パターン 和歌

解説

要求されているポイントに焦点を当てて解答するのはなかなか難しい。和

歌のどの表現にどのような意味が込められているか、一つひとつ考えていく。まず前提として、この歌が、彰子の入内と、これに象徴される藤原家の繁栄を祝う歌であるということは解答に含むべきだろう。

「むらさきの雲とぞみゆる藤の花」では、藤の花を紫の雲に見立てている。紫の雲がめでたいことの前兆とされることを知っていれば格段に解釈しやすくなっただろうが、知らない人も多かったのではないだろうか。

「いかなるやどのしるしなるらむ」は訳すと「どんな家の吉兆なのであるか」となる。「やど」と言われるといわゆる「宿」を想像してしまいそうだが、それでは公任の意図がよくわからないので、これは「家」のことだと解釈したい。「しるし」は主に「①効果②靈験③前兆」の意味をもつが、ここでは「吉兆」と訳するのが最適だろう。

「紫の雲のように見える藤の花はどんな家の吉兆なのであるか」という意味になるが、これはもちろん公任の疑問ではない。「藤原家の吉兆に決まっている！」という返答を期待させることで、同家の繁栄を強調しているのである。以上をまとめると、

本文解説

現代語訳

今となつては昔のこと、女院が、宮中へ初めて入内なさったときに、(道長が)いくつか御屏風をお作りになり、歌人たちに(屏風を飾るための和歌を)詠ませなさって、四月、藤の花が趣深く咲いていた(のを描いた)一面を、四条大納言が、当たってお詠みになったのだが、その日になって、人々(ほかの歌人たちが)が、和歌を持って参上したのに、大納言が、遅く参上

した(なかなか参上しなかった)ので、(道長は)御使者を、遅い旨を度々お伝えするために派遣なさる。権大納言行成は、御屏風をいただいたて、(和歌を)書く役をなさっていたので、いつそう立ったり座ったりして待っていらっしやると、(大納言が)参上なさったので、「(ほかの)歌人たちは、立派な歌も詠み出すことができないが、そうはいつでもやはり(大納言ならうまくお詠みになるだろう)」と、誰もが期待していたところ、御前に参上なさるとすぐに、殿(道長)が、「どうした、あの(屏風に書く)和歌は。遅い」と仰つたので、(大納言は)「まったくうまくお詠みすることができない。下手に詠んで献上してしまうようなことは、献上しないよりも劣っていることだ。和歌を詠む先輩が、優れているなかで、下手な和歌を書かれてしまうようなことは、長く名に残るでしょう」というように、たいそう言い逃れ申し上げなさるが、殿は、「(大納言の和歌がないのは)あつてはならないことだ。ほかの人の和歌はなくてもよいだろうが。(大納言の)御和歌がなくては、まったく、色紙形を書くことができないのだ」などと、熱心に責め上げなさるので、大納言は、「本当に困ったことだなあ。今回は、誰も詠むことができないようだ。なかでも永任であれば、そうはいつでも(うまく詠むだろう)と存じていたのに、岸のやなぎということを詠んだので、とてもおかしなことであるよ。この人たちでさえこのように詠み損じるのだから、公任が読めませんのも道理であるので、お許しくださいさるべきだ」と、あの手この手で逃れ申し上げなさるが、殿は、意地悪く責めなさるので、大納言は、ひどく思い悩んで、懐から取り出した陸奥紙に書いて献上なさると、(殿が)広げて前に置きなさり、帥殿をはじめとして、大勢の上達部・殿上人が、心がひかれると思ったので、「そうはいってもやはり、この大納言は趣なくはお詠みになるまい」と思いつつ、早くも、帥殿が、読みあげなさると、

A むらさきの……(紫色の雲のように見えるほど咲き誇る藤の花は、

一体どんな家の吉兆なのであろうか)

と読みあげなざるのを聞いて、大きな声で褒め称えた。大納言も、殿をはじめ、皆が素晴らしいと思う様子を「ご覧になって、「今やっと、心が少し落ち着きました」などと申し上げなざる。

用語解説

だいら【内裏】 ①宮中②天皇

おもしろし ①趣深い②面白い

はかばかし ①しっかりしている②立派だ

こころにくし【心憎し】 ①奥ゆかしい②上品だ

おほす【仰す】「他サ下二」 ①仰る②お命じになる

わろし【悪し】 ①あまりよくない②下手だ

たてまつる【奉る】「ラ他四」 献上する

いみじ ①はなはだしい②優れている③ひどい

まめやかなり ①まじめだ②熱心だ

ことわり【理】 ①道理②理由

あやにくなり ①意地悪だ②ひどい③都合が悪い

ゆゑ【故】 ①由緒②理由③風情

いつしか ①早くも②早く③してほしい

しるし ①効果②靈験③前兆

ののしる【自ラ四】 ①大騒ぎする②評判になる

けしき【気色】 ①様子②表情③機嫌

(松田朋佳、田村進也、築島愛美)

2015年度 大阪大学 前期 国語

Ⅳ 漢文(明代の評論)

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★☆☆☆	20分	楊維禎『中山盜録』からの出題。楊維禎は、元の末から明の初めにかけての詩人であり、文学者。出身は現在の浙江省、つまり上海周辺である。31歳で科挙という試験に合格し官僚になったが、途中で官僚をやめてしまい、隠居して文化人と交流しつつ詩や酒に明け暮れる生活を送った。	字数は223字である。盗賊が役人を罰しているような荒れた世の中について作者が物申した文章である。少しばかり激しい表現のあるストーリーで、初めて読んだときに引いたかもしれない。しかし、文章内で使われているのは基本の文法事項であり、内容を把握するうえで完全につまずくことはなかったはずだ。文章の構成は、前半部分でエピソードが描かれ、これを踏まえて作者が自身の考えを述べる、という漢文ではよく見られるものである。エピソードを踏まえて、結局作者が一番言いたいのは何かをつかむことが大切であった。 設問は、問一・問二ともにひらがなの書き下しに従って原

傾向と対策

文に返り点を付す問題、という珍しい構成だったが、これはチャンス！ と思っただけでしつかり両方とも正解していきなさい。問四は傍線部(4)と直後の文が対比されていると気づいて、その二つの文を上手に対応させることができたかが力ギであった。問五は傍線部(5)の文構造で使役形が重なっており、わかりにくかったかもしれない。どの部分が使役形の中でどのような役割を果たしているのか見極めることでやると説明のスタートラインに立てるといって難しい問題であった。

《この解説の使い方》

本文読解

「通読」からなる。「通読」は教科書や辞書が使えない状態を想定した、試験場での読み方である。一読で内容を把握できる人がどのように本文を読んでいるかをたどり、自分の読み方を見直そう。一読しておおよその意味がつかめる人の読み(◎)、ワンランク上の読み(☆)、脳内で把握された内容(▼)を適宜載せてある。

設問解説

設問ごとに、どのように解答を導くか詳細に解説した。また、関連知識も掲載している。

本文解説

「書き下し」「現代語訳」「要旨」からなる。本文を読むのに時間がかかってしまう人は、「書き下し」を音読して漢文独特のリズムに慣れるとよい。

なお、作者名・作品名(作品名を書き下す場合を除く)のふりがなは現代仮名遣い、それ以外のふりがなは歴史的仮名遣いを用いている。

解答

問一 未^三嘗^三掠^二農舍鶏犬・賈船子女^一

問二 令^三持^レ刀者^三割^二其脂肉^一

問三 巡検使が汚職する役人を処罰しなくなって長くなったものだ。そして、盗賊が汚職する役人に罰を与えることができています。

問四 たうにしてじんぎたり、これをたうといふは、かならんや。
「とうにしてじんぎたり、これをとうというは、かならんや。」

問五 役人を監視する権力をもつ巡検使に、人がきちんと働くかどうかは巡検使によって変わるということを聞いてよく理解させ、役人が仁義をもたず盗賊が仁義をもつ状態がないようにさせたいということ。

本文読解

通読

中山の某氏、亡命を聚め盗と為し、江淮の間に往来す。

◎注より「亡命」は故郷を逃げ出した者たちのこと。

▼中山のある人が故郷を逃げ出した人々を集めて盗賊を作り、江淮の間を往来していた。

①未嘗掠農舍鶏犬・賈船子女、

◎注より「賈船子女」は商人の子女のこと。問一の問題文を見ると、書き下しが書いてあるな。

▼いままで農舎の鶏犬、商人の子女を奪ったことはない。

必ず某州某群の吏の沓りて狼戾なる者を廉べ、

◎注より「沓りて狼戾なる」は欲張りで狼のように狂暴であるという意味。

▼どこかの官僚で欲張りで狂暴な者を調べて、

中夜其の家に至り、其の主を擒にし、柱に反接し、盗は堂上に坐し、

◎注より「反接」は両手を後ろ手に縛るという意味。

☆「とりこ」は現代でも心を奪われるという意味で使われていたな。たしかほかにも捕虜という意味があったっけ。「反接し、」とも述べられているから、きっと拘束されたのだろう。

▼深夜その家に行つて、その家主の身柄を拘束し、両手を後ろ手に縛つて、盗賊は堂上に座つて、

②令持刀者割其脂肉、

◎傍線部(2)は問題を見ると書き下しが書いてあるな。「令」が含まれているから使役形だな。

▼刀を持っている人にその脂肉をえぐらせて、

◎なかなかエグいことをするなあ。

反つて其の口に啖はし、之に問ひて曰く「痛楚しきや」と。

▼その口にくらわせて、尋ねて言うことには「苦しいか?」と。

主哀き吼びて曰く「痛楚し、痛楚し」と。

▼その人は泣き叫んで「苦しい、苦しい」と言った。

◎痛々しいなあ。

盗曰く「汝民膏を割剥るは、痛亦た爾し」と。

◎注より「民膏」は民の労働の結晶のこと。たしか「爾し」は有名な言い回しで、このようであるという意味だったな。

▼「あなたが民の労働の結晶をえぐる、その痛みはまたこのようである」と盗賊は言った。

悉く其の財を取り、諸を通衢に置き、民をして争ひ之を取らしめ、其の主を殺し、其の室を焚く。

◎注より「通衢」は四方に通じる大通りのこと。

▼すべてその財産を奪い、これを大通りに置き、民に争わせてこれを取らせ、その家主を殺し、その家を焼いた。

◎徹底的にやるなあ。

楊子曰く「繡斧沓吏を聴かざること、久しきかな。而して盗之を能くす。

◎注より「繡斧」は汚職を取り締まる役人のこと。「沓吏」は汚職する役人のこと。「久しき」は日本語でも少し使うけど、長い時間みたいな感じかな。

▼汚職を取り締まる役人が汚職をする役人を裁かなくなって長いなあ。そして、盗賊はこれが可能である。

其の魁を戮し、其の孳に速ばざるは、仁なり。

◎注より「魁」は親玉のこと。「孳」は妻子のこと。「速ばざる」は文脈から、手が「及ばない」という意味合いかな。

☆「仁」は仁徳の仁だろう。

▼親玉を殺すが、その妻子には手を出さないということとは仁徳である。

帑蔵を窮めて之を民に還すは、義なり。

◎注より「帑蔵」は所蔵される金品のこと。「還す」は還元の意味合いかな。

☆「義」は正義の義だろう。前の「仁」とあわせると「仁義」だ。

▼金品を奪ってこれを民に還元するのは正義である。

鳴呼、盗而仁義、謂之盗、可乎。

◎傍線部(4)は返り点がなくて読みにくいな……。あとで考えよう。

盗に不ずして不仁不義たり、之を盗に不ずと謂ふは、可ならんや。

◎文の構造が直前の傍線部(4)と非常に似てるなあ。絶対傍線部(4)の問題を解くときに使いそうだな。文もちょっとややこしい。

▼盗賊ではないのに、仁も義もないのは盗でないといえるのだろうか、いや、いえない。

董の毒、能く人を殺し、亦た能く病を治す。

◎注より「董」はトリカブトのこと。この「亦」は同様のことをつなげる。「また」だな。

▼トリカブトの毒は人を殺すこともできるが、また人の病を治すこともできる。

◎「之」はトリカブトのことだな。

▼よい医者、つまり腕のいい医者がこれを使う。

盗能く人を殺し、亦た能く盗を攻む。

◎この構造は少し前の「董の毒く」の文と同じだな。きっと比較しているのだろう。

▼盗賊は人を殺すこともできるが、また盗賊を攻めることもできる。

亦た願だ其の之を使ふ者の如何のみ。

☆「如何」という漢字の順番だと「どうするか」という意味だな。たしか「何如」だと「どのようであるか」だったはずだ。ややこしい。

▼これを使う者がどうするかによるだけだ。

吾故に其の事を志し、

▼だから私はこのことを記し、

⑤才を用ゐる者をして聞知し、吏は不仁にして盗は仁ならしむること勿からしめんとす。

▼才を用いる者に聞いて理解させ、官僚が不仁で盗賊が仁になることがないようにさせる。

◎使役形のようなものが二つもあって文の構造がややこしいな……。

設問解説

問一

解答 未^三 嘗^二 掠^二 農舍 鶏 犬・賈 船 子 女^一

難易度 ★☆☆☆☆

設問パターン 返り点の付与

解説

問題文にひらがなの書き下し文が提示されていて、それに沿って白文に返り点を振る問題である。返り点と指示されているので、送り仮名を振る必要はない。

注意すべきポイントは「未」の再読文字が使われている点である。ここで「未だ嘗てくせず」は「今までまったくくしない」という意味をもっている。ここでは、「かすめず」なので、最後に読む漢字が「掠」ではなく「未」に戻ることを読めないように気をつけよう。

ちなみに現代語訳は、注を参考にしながら「未だ嘗てくせず」に気をつけて訳すと、「農民の小屋の鶏や犬を奪ったり、商人の子女を利益のために誘拐したりするようなことはまったくしなかった。」となる。

問二

解答 令^三 持^レ 刀 者 割^二 其 脂 肉^一

難易度 ★☆☆☆☆

設問パターン 返り点の付与

解説

これも問一と同様、問題文にひらがなの書き下しが提示されていて、それに沿って白文に返り点を振る問題。連続して白文に返り点を振る問題が出題されるのは珍しいが、返り点の付与は難しくはないので問一・問二ともにしっかりと正解していきたい。

ここでの注意すべきポイントはこの文全体で

「(A) 令^ム B^{ラシテ} C^(セ) D^(ニ) 「つまり」(A) B ヲシテ D ヲ C (セ) しム

という主語が省略された使役形の文になっていることである。これは「(A)は」(BにDをCさせる)」という意味である。

この文でのAにあたる主語は直前の部分から「盗」だとわかる。さらに、傍線部(2)の中身を使役形の文での役割に当てはめると、Bは「持刀者」Cは「刳」Dは「其脂肉」となる。傍線部(2)が使役形の文であり、どの部分が何の役割を果たしているか判断したうえで返り点を振っていけば、最後に読む漢字が「令」であるのも忘れることはないはずだ。

ちなみに現代語訳は、使役形の構造に気をつけて訳すと、「刀を持っている人に家主のぜい肉を削り取らせ、それを逆に家主の口に食べさせた。」となる。

問三

解答 巡検使が汚職する役人を処罰しなくなって長くなったものだ。そして、盗賊が汚職する役人に罰を与えることができています。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

傍線部(3)を書き下すと「繡斧沓吏を聴かざること、久しきかな。而して盗之を能くす。」となる。

「繡斧」は注より、役人の汚職を取り締まる巡検使の意味。同様に注より、「沓吏」は汚職する役人の意味である。「こ」での「聴く」は現代語での裁くという字が当てはまり、「処罰する・取り締まる」という意味になる。「久しき」は現代語でも使うように長い時間がたったという意味。久しぶりという言葉からも推測できるだろう。「久矣」は「久かな」と読み、詠嘆の意味になる。「哉」という漢字が詠嘆の意味としてよく知られているが、別の漢字

でも表せることも知っておきたい。

これらをまとめると、傍線部前半の現代語訳は「巡検使が汚職する役人を処罰しなくなって長くなったものだ。」となる。

後半の現代語訳に移ろう。「而して」は大事な文法事項で「そうして・それから」のような意味がある。「而」という漢字は「而して」「而して」と読むときは順接、「而れども」「而るに」「而も」と読むときは逆接となる。さらに、置き字として順接、逆接の意味があることも同時にチェックしていくとよい。

「盗之を能くす」は盗賊が之をできていると訳せる。「能くす」はうまくやっている、できているという意味だ。能力という字に使われたり、「あなたは」で不可能を表したりすることから可能の意味を推測できる。「之」とは「盗賊がよくできていたこと」であり、その内容は、第1段落を踏まえると傍線部(3)に含まれている「沓吏を処罰すること」だとわかる。

これらをまとめると、傍線部後半の現代語訳は「そして、盗賊が汚職する役人に罰を与えることができています。」となる。

問四

解答 たうにしてじんぎたり、これをたうといふは、かならんや。

「とうにしてじんぎたり、これをとうというは、かならんや。」

難易度 ★★☆☆☆

解答パターン ひらがなの書き下し

解説

この問題はただ傍線部(4)に注目しているだけだとまったく解答が見えてこない。しかし、その直後の文「盗に不ずして不仁不義たり、之を盗に不ずと謂ふは、可ならんや。」に目を向けると、あれ？ 傍線部(4)と非常に似て

いるな、と気づくはずだ。実際にこの二文は対比された関係になっている。つまり、傍線部(4)の要素を分けて、この直後の文とそれぞれ対応させていくことで答えを導き出すことができるのである。

簡単な部分から見ていくと「可乎」は直後の文と同様に「可ならんや」となるのがわかる。「謂之盗」は直後の文の「之を盗に不ずと謂ふは」と対比されており、「之を盗と謂ふは」と読むことがわかる。「盗而仁義」は直後の文の「盗に不ずして不仁不義たり」と対比されており、「盗にして、仁義たり」と読むことがわかる。これでいつのまにか正答のパーツがすべてそろってしまふのだ。

これらをまとめて、ひらがなになおすと解答になる。

問五

解答 役人を監視する権力をもつ巡検使に、人がきちんと働くかどうかは巡検使によって変わるということを聞いてよく理解させ、役人が仁義をもたず盗賊が仁義をもつ状態がないようにさせたいということ。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明

解説

問題で指示されている傍線部がある文の一部であるとき、その傍線部を含む文全体に目を向けつつ考えると、正答にたどり着きやすくなる。ここではまず傍線部(5)を含む一文を書き下して現代語訳する。

書き下し文は「吾故に其の事を記し、才を用ゐる者をして聞知し、吏は不仁にして盗は仁ならしむること勿からしめんとす」となる。

一見傍線部(5)の構造はわかりにくいのが、大きな使役の文の中に小さな使役の文が内蔵された構造になっている。全体の使役の文は「(吾)才を用ゐる

者をして聞知し、吏は不仁にして盗は仁ならしむること勿から『しむ』であり、内蔵された使役の文は「才を用ゐる者」吏は不仁にして盗は仁ならしむ』である。() 内に示されているのが使役の文の主語だ。

傍線部(5)を含む一文をわかりやすく直訳すると「だから、私はそのことを書き記し、才を使う人によく聞かせ、理解させて(才を使う人が)役人が仁義をもたず、盗賊が仁義をもつ状態にさせることがないようにさせる。」となる。

ここで問題の指示どおり「才を用ゐる者」について考えていこう。

作者はあることを書き記すことで才を使う人に何かをさせたいので、逆に考えると才を使う人は作者が書き記す目的にかかわる対象であるとわかる。ここで作者が書き記す目的を探す。

第2段落前半を見ると、巡検使が汚職する役人を取り締まらず、代わりに盗賊が汚職する役人を取り締まっている状況について作者が嘆いている。この状況が傍線部(5)の後半部で作者が改善したいと願っている状況に当てはまり、これが書き記すきっかけだとわかる。つまり、「吏は不仁にして盗は仁ならしむる」での「吏」は現在の状況で不仁である役人、「盗」は仁である盗賊のことだ。この状況について改善させることができるのは役人を取り締まる巡検使であり、これが「才を用ゐる人」である。ここでの「才」は巡検使が扱うものであり、役人のことを指す。「才」は才能のある人材、という意味合いだ。

次に作者が聞かせて理解させようとしている内容を明らかにしよう。

第2段落後半を見ると「トリカブトの毒は毒にも薬にもなる。盗賊は人を殺せるが、(汚職する役人という)他の盗賊を攻撃することもできる。同様に、ただそれを使う人がどうするか、だけなのだ。」とある。つまりこの部分で述べていることは「物事はそれを扱う人によって良し悪しが変わる」と

いうことである。

これを巡検使の例について適用すると、「役人も、役人を監視する巡検使によってその良し悪しが変わる」ということになる。そしてこれが、作者が聞かせて理解させようとしている内容なのである。

ポイントは、

- ①傍線部(5)の現代語訳「『才』を使う人によく聞かせ、理解させて(才を使う人が)役人が仁義をもたず、盗賊が仁義をもつ状態にさせることとがないようにさせる」ができていくか。
 - ②「才を用ゐる者」が指す人物が巡検使であることがわかっているか。
 - ③「聞いて理解させることの内容」が、物事はそれを扱う人によって良し悪しが変わることだとわかっているか。
- の三つ。

本文解説

第1段落 盗賊による役人の処罰

書き下し

中山の某氏、亡命を聚め盗と為し、江淮の間に往来す。未だ嘗て農舎の鶏犬・賈船の子女を掠めず、必ず某州某群の吏の沓りて狼戾なる者を廉べ、中夜其の家に至り、其の主を擒にし、柱に反接し、盗は堂上に坐し、刀を持ちし者をして其の脂肉を刳らしめ、反つて其の口に啖はし、之に問ひて曰く「痛楚しきや」と。主哀き吼びて曰く「痛楚し、痛楚し」と。盗曰く「汝民膏を割剥るは、痛亦た爾し」と。悉く其の財を取り、諸を通衢に置き、民をして争ひ之を取らしめ、其の主を殺し、其の室を焚く。

現代語訳

中山(II地名)のある人が故郷を逃げ出した者達を集めて盗賊を作り、江淮の周辺を行きかっていた。(その盗賊は)農民の小屋の鶏や犬を奪ったり、商人の子女を利益のために誘拐したりするようなことはまったくなかった。必ずある州やある郡の役人で欲張りで狼のように凶暴な人を調べた。そして、夜中にその家に行き、家主(II役人)を拘束して、柱にその両手を後ろ手に縛りつけたのち、盗賊は床の上に座った。刀を持っている人に家主のぜい肉を削り取らせ、それを逆に家主の口に食べさせた。盗賊は家主に「苦しいか?」と尋ねた。家主は泣き叫んで「苦しい、苦しい」と言った。盗賊は「おまえは民の労働の結晶を奪い取ったが、その痛みはまたこのようである」と言った。(盗賊は)すべてその財産を奪って、これを四方に通じる大通りに置き、民に争わせてこれを取らせ、その家主を殺し、その家を焼いた。

第2段落 巡検使への提言

書き下し

楊子曰く「繡斧沓吏を聴かざること、久しきかな。而して盗之を能くす。其の魁を殲し、其の孽に逮ばざるは、仁なり。帑藏を窮めて之を民に還すは、義なり。嗚呼、盗にして仁義たり、之を盗と謂ふは、可ならんや。盗に不ずして不仁不義たり、之を盗に不ずと謂ふは、可ならんや。毒、能く人を殺し、亦た能く病を治す。医の良なる者之を使ふ。盗能く人を殺し、亦た能く盗を攻む。亦た顧だ其の之を使ふ者の如何のみ。吾故に其の事を志し、才を用ゐる者をして聞知し、吏は不仁にして盗は仁ならしむること勿からしめんとす。」と。

現代語訳

楊子と言ふことには、「巡検使が汚職する役人を処罰しなくなって長くな

ったものだ。そして、(代わりに) 盗賊が汚職する役人を罰することができている。その親玉を殺し、その妻子には手を出さないのは思いやりである。所蔵される金品をことごとく奪って、これを庶民に返すのは正義である。ああ、盗賊が仁義をもっているなら、これを盗賊と呼ぶことができるだろうか、いや、できない。盗賊でないのに仁義をもたない人々(≡汚職する役人)を盗賊ではないといえるだろうか、いや、いえない。トリカブトの毒は人を殺すこともできるが、病気を治すこともまたできる。医者で腕のよい人はこれを使うのだ。盗賊は人を殺すこともできるが、(汚職する役人という) 盗賊を攻撃することもできる。同様に、ただそれを使う人がどうするか、だけなのだ。だから、私はそのことを書き記し、才能をもつ人々(≡役人)を使う人々(≡巡検使)に聞いてよく理解させ、役人が仁義をもたず、盗賊が仁義をもつようなことがないようにさせようとするのだ。」と。

要旨

ある盗賊は汚職を行う役人だけを襲った。役人を痛めつけて殺し、家を焼き、奪った財産を民に与えた。作者は、役人を取り締まる巡検使を教育することによって役人ではなく盗賊が仁義をもつ現状を脱却するのだと説く。

(100字)

(竹本有輝、若杉柊志、上野仁士朗)